

短期留学生と日本人学生を対象とした混合クラスにおける 異文化間ソーシャルスキル学習セッションの実践

A Report on the Cross-cultural Social Skills Learning Session for Short-term in a Mixed Class of International Students in Japan and Japanese Students

高濱 愛 (岡山大学国際センター)

Ai TAKAHAMA (International Center, Okayama University)

田中 共子 (岡山大学社会文化科学研究科)

Tomoko TANAKA (Graduate School of Humanities and Social Sciences, Okayama University)

要 旨

在日短期留学生と日本人学生の混合クラスで試みられた、異文化間ソーシャルスキルの学習セッションについて報告する。行動療法の背景的理論である学習理論に基づき、留学生が日本で必要となるソーシャルスキルを、小集団でのロールプレイを用いて認知行動的に学習するセッションが行われた。日本人学生は、留学生の学習を促す補助役を務めた。記録用紙を用いた参加者による自己報告をみると、セッションによって、留学生の認知や感情や行動に変化が生じており、日本文化がより理解できた、異文化での振る舞いに不安が減り自信が増した、うまく振る舞えるようになったなどの報告が得られた。日本人学生は自他の文化への学習の動機付けと、異文化滞在者の支援意欲が高まり、文化仲介者としての営みにより習熟したと述べている。この教育的機会の設定が、学内での両集団の交流に役立つことが期待される。

[キーワード：留学生、日本人学生、異文化間ソーシャルスキル、ソーシャルスキル学習]

Summary

The purpose of this paper is to report on a cross-cultural social skills learning session in a mixed class of short-term exchange students in Japan and Japanese students. The session was based on a training theory known to be useful in behavior therapy. In the session, international students cognitively and behaviorally learned the social skills needed to live in Japan through role-plays within small groups. Japanese students also joined the session as helpers to facilitate the learning of the international students. The results of a questionnaire showed that the behavior of the international students and their understanding of Japanese culture changed through the session. In the questionnaire, the international students answered that they had less anxiety and more confidence in their behavior in Japan and that they felt they could behave better after they attended the session. Moreover, it was found that the Japanese students were willing to learn more about both their own culture and the culture of others and to help foreigners as cross-cultural mediators by putting the skills they learned in the session into practice. Lastly, it would be reasonable to expect that this educational session is helpful in fostering cross-cultural communication between international students and Japanese students.

[Key words : international students, Japanese students, cross-cultural social skills, social skills learning]

目 次

- | | |
|-----------------|--------|
| I. はじめに | IV. 結果 |
| II. 先行研究と本研究の目的 | V. 考察 |
| III. 研究方法 | |

I. はじめに

日本の国公私立大学 362 校を対象に実施した、横田 (2006) による調査の報告書によれば、今後の外国人留学生の受け入れを「大いに増やす」「少し増やす」と回答した大学は、112 校 (31%) であったという。これに「現状維持」と回答した 94 校 (26%) を加えると、合計 57% となる。すなわち約 3 分の 2 の大学が、留学生の受け入れを維持または拡大したいという、肯定的な姿勢を持っている。特に国立大学は、私立大学や公立大学に比べて、留学生受け入れの増加方針を持つ大学の割合が高いとされ、今後の受け入れの増加が予想されると述べている。横田は、こうした受け入れの増加方針の理由についてもまとめている。その中で、「大学間交流協定締結に基づく、短期留学生の漸増を目指す短期プログラム拡大型」と評された、いわば短期間の交換留学を増やす形で拡大路線を取る大学が、少なからず存在することが指摘されている。実際、1995 年に国立大学 3 校に上記の交流協定が締結されて以来、現在は 28 の国立大学法人で全国に短期交換留学プログラムが広がっている (文部科学省高等教育局学生支援課、2006)。更に私立大学でも、類似の短期間のプログラムが数多く推進されているという現状にある。ただし短期留学に限らず、外国人留学生と「日本人学生との交流が進まない」ことを、受け入れに伴う問題点として認識する学校は 67 校 (23.2%) にも及ぶこと (横田、2006) は注目される。これは受け入れ側の大学のみならず、留学生本人にとっても克服すべき課題と考えるべきであろう。では増加しつつある短期間限定の留学にとって、これがなぜ特に気になるのか。それは彼らの在日期間が比較的短く、多くは 1 年程度でしかないためである。日本のやり方に慣れるだけでもかなりの期間を費やしてしまうとみるなら、日本人学生との交流を進めていくには、時間的な制限がいつそう大きなハードルとなることが予想される。

こう考えていくと短期留学の増加が、交流が進まないとして問題視される状況を悪化させかねないことが危惧されよう。日本人との交流を効果的に進める方法を学習する、教育的な機会が十分提供可能になれば、試行錯誤だけで多くの時間を費やす余裕がない彼らにとって朗報と言えるだろう。日本人学生との交流促進は、受け入れ側の大学にとっても望ましいことに違いない。積極的に交換留学制度を制定することにあわせて、こうした教育の機会を整えていくことも、大学の責務といえるかもしれない。

短期の留学生の場合は、長期間在学する正規留学生と異なり、大学側がその授業設定に苦勞することも多い。通常の開講授業に彼らを組み込むことは、語学能力や学修プランの特異性から難しい面もあり、特設の取り出し

授業に頼らざるを得ない部分がある。もし日本人学生を取り込んで、大学の教育的な営みの中により違和感なく、その教育を位置づけることができれば望ましいが、ニーズの特殊な彼らと日本人学生が共有する教育的な機会は、なかなか案出しにくいのが実情であろう。本稿では、日本人学生と留学生との混合クラスを編成し、そこで日本人学生を留学生の文化学習のための補佐役として位置づけることで、留学生への適応教育と日本人学生への異文化接触に関わる教育の両立を試みたい。こうした混合クラスは教育機会の設定に悩む大学にとっても好ましいだろうし、また日本人学生の側に働きかける交流促進策としても期待できるかもしれない。

交流促進のために何にアプローチしていくかだが、留学生と日本人学生との交流が進まない理由を考えていく場合、まずは言葉、つまり外国語でのコミュニケーション能力の不足という問題に思い至るかもしれない。しかし一定以上の語学力を持っていても、なお困る問題があることが指摘されている (田中、1994)。それは文化圏ごとに異なる、行動の規範や様式の問題である。留学生が、日本人学生と期待したようなコミュニケーションがとれず、交流がなかなか進まないのは、どちらかあるいは両方が外国語を使っているからというだけではない。自分の国や文化では馴染みのないやり方で、社会生活、特に対人行動を進めねばならない不自由があったり、社会文化的文脈からみて違和感のある行動が誤解を生んだり、その仕組みに気づかないまま否定的感情を抱えて交流せざるを得なかつたりすることが、対人関係形成の障害となっていくことが考えられるのである。

本稿では異文化接触場面において、文化的な行動の規範や様式を鑑みたソーシャルスキルに焦点を当て、その学習セッションを試みる。ある文化において対人関係の形成・維持・発展のために必要とされる行動は、「ソーシャルスキル」と呼ばれている (田中、1994)。換言すれば、ソーシャルスキルとは、「人づきあいの技能 (田中、2000a)」のことである。もし留学など異文化圏への移行に先立って、留学先で必要になるソーシャルスキルを事前に身につけておくことができれば、留学後の対人関係を速やかにかつ円滑に形成することができるであろう (田中、2000a)。形成された留学生の対人関係網 (ソーシャルサポート・ネットワーク) は、各種援助の供給源となり、異文化適応の上で極めて重要な役割を果たすことが知られている (田中、1998)。ソーシャルスキルは、認知や行動の具体的なリストとして明示される。行動療法で用いられるような技法、例えばロールプレイによる実演で現実感を養ったり、小段階方式で行動形成を図ったり、肯定的なフィードバックを重ねて行動の実施を促したり、実際の行動例を目の前で見ながら観察学習をするなどが、効果的な学習方法の工夫として取り入れ

られている。こうしたソーシャルスキルの学習はこれまで、幼児から大人に至る様々な対象に向けて実施されてきている。

今回は異文化圏において必要となる認知や行動の体系を学ぶ場として、異文化間ソーシャルスキル学習のセッションを構成し、その実践について報告する。参加者の編成としては、留学生と日本人学生が小グループとして集う、混合クラスとする。留学生には日本における文化学習を進め、また日本人とのつき合いにみられる対人行動を、実践的な形で学ぶ教育的な適応支援策の一貫として、本セッションを実施する。日本人学生には、この学習に学習補助者として参加してもらいながら、留学生の困難を親身に理解するホストとなること、また無自覚に行っている日本人としての日常的な行動を振り返り、認知行動的な次元での文化文法が存在について、客観的な眼を養うことを期待する。こうして留学生と日本人学生の混合クラスでのセッションから、異文化や自文化への理解を促し、実践的な課題場面を通じての行動学習を起点に、その後の両者の交流を促していくことにつなげたいと考えている。

II. 先行研究と本報告の目的

在日留学生や日本人の海外留学生を対象にした異文化適応のためのソーシャルスキル学習については、1990年代以降の田中らの一連の研究がある（田中、2000b；八島・田中、1996；Yashima & Tanaka, 2001 など）。在日外国人留学生を対象とした、ソーシャルスキル学習の実験的セッションの試行例が報告されている（田中、2000a）。そこでは小グループが編成され、選択された複数の課題場面でのロールプレイが試みられている。講師、またはファシリテーターやトレーナーとも呼ばれるが、その進行のもとで、留学生は課題場面にそって、日本語や英語を使って寸劇を実施する。講師の補佐役は、コ・トレーナーやコ・ファシリテーターとも称されるが、そうした役目を持って参加する少数の日本人が、ホスト役として演技の際の相手を務めている。これはロールプレイに現実味をもたせるためとされている。セッションの効果は、留学生の認知・行動・情緒に渡っており、課題場面での行動パターンに関する知識の獲得に留まらず、異文化接触の意欲の向上や異文化接触場面への不安の低減など、多岐にわたる肯定的な心理的影響が確認されている（田中、2003a）。

しかし日本人参加者がいた場合、その人たちへの教育的な効果についてはまだ明らかにされていない。田中（2003a）でも、日本人ホストの関わりは補佐的で副次的なものとして記されているだけで、その役割の務め方には検討の余地が残されている。彼らの存在をどう活用す

るべきかについて、まとまった知見はみられない。また混合クラスで醸成される、共に学ぶ場としての空気をどのように演出していくかは、教育的に重要な課題であるにも関わらず、セッション構成にどう反映させたいのかは未詳である。短期留学生に特に焦点を当てた場合、どのような工夫が適切なのか、十分検討されていない視点である。

本稿では、留学予定が比較的短期間である留学生を対象として、日本人学生と共に混合クラスで異文化間ソーシャルスキル学習のセッションを行った場合の、学生の自己評価とコメントについて検討を行う。セッションを通じて、参加した留学生と日本人学生はどのようなことを学び考え、さらにどう今後へつなげようとしているのか。本報告の目的は、短期留学生と日本人学生を対象とした混合クラスにおける、異文化間ソーシャルスキル学習のセッションの実践例を紹介し、その教育効果と後の展開に向けての課題について探ることである。

III. 実施方法

田中（2003b）のセッションの基本骨格を踏襲しつつ、今回の参加者のニーズや反応にあわせた対応を行って、異文化間ソーシャルスキル学習のセッションを実施した。セッションの基本的な流れは、以下の通りである。導入（ソーシャルスキルとその学習方法についての説明）、課題場面の設定（学習者のニーズを反映させながら、ロールプレイ用の場面を設定）、一回目のロールプレイ（日本人学生を相手役として、留学生が自由に演技）、フィードバック（留学生の演技のよいところを探す、工夫への助言）、解説（文化的な背景や認知行動的なパターンの説明、質疑）、二回目のロールプレイ（学習したことを取り入れて工夫した演技）、フィードバック（留学生の演技のよくなったところ、演技者らの感想）、まとめ（発展的質問、要点の整理）である。

留学生参加者には一通り、自由に演技してもらう。その後周囲で見ていた人たちから、肯定的なコメントを出してもらうよう促す。演技後は拍手でねぎらい、講師からも肯定的な言葉をかけ、つとめて誉める。否定的な言葉を避け、受容的な雰囲気の中で、思いのままに様々な行動を試すことができるよう配慮する。セッションは特別な学習空間であることを説明し、実生活ではこうして学んだ行動を使うかどうかは自分の判断によること、自分のとる行動が相手にどんなインパクトを与えるか、どう受け取られるかを考えた上で、自文化に即する行動も日本文化に即する行動も、その他の行動も、自由に選択することができることを説明した。知らなければ選択の自由はないのと同じことで、この場では日本的な行動を具体的に紹介してみることで、練習として自由に試すことができ

ること、日本人参加者に意見を聞いたり質問したりできることを説明した。

<セッションの設定>

“日本人の行動入門： Introduction to Japanese Behavior”と名付けた、週1回90分×2回（1週間間隔）の留学生向けセッションを200X年度に実施し⁽¹⁾、日本人学生も参加可能とした。

<対象者>

X大学に在学する、在日予定が一年以内である、いわゆる短期留学生7名（以下I1～I7と表記する）（男子3名、女子4名）、および同じ大学の日本人学生11名（以下J1～J11と表記）（男子3名、女子8名）。留学生は全員来日1年以内で、日本語力については初級（日常会話にも困難がある）から中級（日常会話がこなせる程度）と自己評価しており、全員が英語圏の大学に在籍している。留学生の出身地域は、北米4名、オセアニア2名、西欧1名。留学生は全員学部生、日本人学生は1名が大学院生、10名が学部生。なお日本人学生には留学希望者が含まれ、3名が後に海外の大学に留学している。

<セッションの流れ>

セッション中の使用言語は、日本語と英語とした。大学の先生との接し方がよく分からないとか、コンパの場での振る舞いに困惑したといった留学生の体験をもとに、進行役である日本人講師1名⁽²⁾が、2つの課題場面を設定した。第1回目のセッションで取り上げた「場面1」は「教授の部屋の訪問」、第2回目セッションでの「場面2」は「飲み会（飲みコミュニケーション）」である。

問題場面として頻繁に挙げられる場面を、例示場面としてビデオテープに納めておいたものを活用した。課題場面の映像を途中まで留学生に見せて、もしその続きを自分がやるとしたらどうするかと尋ねた。そして登場人物になりかわって、日本人学生を相手に即興の寸劇を行うというロールプレイ方式で、自由に演じてもらった。他の人の演技をまねしなくてよいので、自分の思いついたままを演じるようにと勧めた。

その後、日本の文化的背景の説明を行い、例示演技を紹介したビデオテープも再生して見せ、更に質問や感想を募り、日本人学生や講師が社会文化的文脈下の行動について話していき、意見交換を通じて疑問点の解消を図った。その後、新たに知ったことを自由に取り入れて、2度目のロールプレイをしてもらった。それを見た日本人学生には、よくなったと思うところを中心に留学生の演技への感想を言ってもらい、更に工夫できるところがあればそれも挙げてもらった。留学生は、記録用紙に自分の演技の評価や感想を記入した。日本人学生も同様に

自分の演技や学習についてふり返った。合計2回のセッションにおけるロールプレイは、ビデオテープに記録した。

<記録用紙>

参加者の評価や感想を、2種類の記録用紙を用いて尋ねた（表1）。記録用紙1は、ロールプレイ評価表である。ロールプレイ中の演技を振り返るもので、留学生は課題場面において、最初と再度の自分の演技をそれぞれ自己評価した。日本人学生はその相手役としての自分の演技に対する自己評価を、同じく記入した。記録用紙2は、セッション評価表である。第1回目セッションと第2回目セッションを併せて、セッション全体に関する評価や感想を尋ねた。記録用紙の指示は日本語と英語を併記し、回答はいずれの言語でもよいとした。

IV. 結果

セッションと演技に関して、参加者が記録用紙の選択形式や自由記述形式の設問に対して記入した回答について、概要と具体例を以下に示していく。

第一回目のセッションは学習の形式についての説明を多く挟み、学習の仕方に慣れてもらうためのウォーミングアップの意味を持つため、ロールプレイの自己評価については、学習方法が比較的定着した第二回目セッションで記入用紙1に記した内容を、分析の対象とした。セッション自体の効果については、第一回目と第二回目のセッションを分離しては考えにくいので、参加者には二度に渡って行われたセッション全体を評価の対象としてもらった。第二回目セッションの最後に、セッション全体を振り返って、記録用紙2に記した回答を分析の対象とした。

個人情報保護のため、固有名詞が記されている部分を伏せるなど、回答の一部に修正を施した。また明らかな誤字・脱字には訂正を加えた。留学生が英語で回答したものについては、筆者が日本語に訳して記載した。記録用紙1は全員が提出したが、記録用紙2は日本人学生3名が未提出であった。全員が全項目にもれなく記入しているわけではなく、空欄や明らかな回答の間違いについては記載を省略した。また欄外に感想を書き込むなど比較的自由に用紙を用いたものもいた。以下の分析では、教示に該当する回答部分について記していく。

1. 演技の評価について

留学生の演技の自己評価については、最初の演技は「まあまあ」だったと答えていた者が多かったが、二度目には「うまい」と答えた者が最多になっている（表2）。日本人学生の相手役としての演技の振り返りも、最初は

表1 記録用紙の項目

<p><記録用紙1> 演技について</p> <p>1. 自分の演技をふりかえってください。</p> <p>(1) 1回目</p> <p>A. どのくらいうまくできましたか? (選択) 大変うまい、うまい、まあまあ、うまくない</p> <p>B. 次はどうしたらよいと思いますか? (自由記述)</p> <p>(2) 2回目</p> <p>A. どのくらいうまくできましたか? (選択) 大変うまい、うまい、まあまあ、うまくない</p> <p>B. 1回目と2回目では、あなたの行動はどこか違いましたか? (自由記述)</p> <p>C. 1回目と2回目では、あなたの気持ちはどこか違いましたか? (自由記述)</p> <p>(3) 次はどうしたらよいと思いますか? (自由記述)</p>
<p><記録用紙2> セッション全体について</p> <p>1. 今回の授業でやったことを実際に使うことができましたか。(自由記述)</p> <p>(1) もしあれば、それはどのような状況でしたか。(自由記述)</p> <p>(2) その状況でどのように振舞いましたか。(自由記述)</p> <p>2. 授業でやったことをこれから使う機会があると思いますか。(自由記述)</p> <p>3. 授業でやったことを使ってみたいと思いますか。(自由記述)</p> <p>4. 機会があれば、さらにどのようなことを習いたいと思いますか。(自由記述)</p>

表2 留学生の演技の自己評価

留学生	初回ロールプレイ 評価	再ロールプレイ 評価	評価の差
I1	まあまあ	うまい	1段階上昇
I2	まあまあ	うまい	1段階上昇
I3	まあまあ	うまい	1段階上昇
I4	うまい	うまい	変化なし
I5	うまくない	まあまあ	1段階上昇
I6	まあまあ	うまい	1段階上昇
I7	まあまあ	うまくない	1段階下降

表3 日本人学生の相手役としての演技への自己評価

学生	初回ロールプレイ 評価	再ロールプレイ 評価	評価の差
J1	まあまあ	まあまあ	変化なし
J2	まあまあ	大変うまい	2段階上昇
J3	うまい	うまい	変化なし
J4	まあまあ	未回答	—
J5	まあまあ	うまい	1段階上昇
J6	うまくない	未回答	—
J7	うまい	うまい	変化なし
J8	うまくない	まあまあ	1段階上昇

「まあまあ」、二度目は「うまい」と答えた者が最多である(表3)。

初回ロールプレイと再度のロールプレイに対する、参加者の評価の差を求めてみた(表2、表3)。「大変うまい、うまい、まあまあ、うまくない」をパフォーマンス評価の4段階とみて、隣接する評価に移動したときに1段階の移動、そのまた隣の評価まで移動した場合に2段階の移動とみなし、上下両方向への変化をみた。その結果、初回と比べて二度目の方が、1名は評価が下がったが、8名では上がっていた。1回目より2回目のパフォーマンスの評価が下がった1名の留学生(I7)に関しては、その理由を、「2回目は少し早すぎた」と振り返って

いる。二度目の方が、パフォーマンスが向上したと考える参加者が多い。

最初の演技と、後でもう一度繰り返したときの再度の演技との違いを記してもらおうと、行動や気持ちに、何らかの変化があったとする記述がみられる。以下に、変化のおよそを記してから、各参加者の具体的なコメントを付記する。コメント文中の下線は筆者によるもので、特に注目される部分を意味する。

<行動についての变化>

留学生は知識を得た、求められる行動を理解できた、

と述べている。文化的背景や行動パターンという知識を学んだことは、文化的な行動の理由を納得することに通じている。自分の行動に対しては、より自覚的になっている。振る舞いは、前より自然になった、うまくなった、とふり返っている。

日本人学生は、自分の行動を改めて意識した、詳細な説明に心がけた、と述べている。多くが演技をする際に、意識して説明を加えたことがわかる。

【留学生】

- ・ 1回目はどうしてもいまいきよくわからなかったが、2回目には意味やなぜそうするのかという理由が分かったのでもっと自然になった (I1)
- ・ 2回目にはビールを注ぐことについて学んだ。例えば、どのようにコップを持つかということや、注ぎ方の順序を学んだ。2回目には、先生がスピーチと乾杯の発声を求められていることを理解した (I2)
- ・ (1回目には) この状況でとるべき正しい行動のスキルに関する知識がなかった (I3)
- ・ 2回目は1回目よりうまくなり、もっと自分の行動を意識するようになった (I4)
- ・ 実際にどうすべきか分かっていた (I5)
- ・ もっと情報を得ていた (I6)

【日本人学生】

- ・ 教授が乾杯の音頭を取るとき、他の生徒は座ったままであるべきだ、という説明を加えた (J1)
- ・ 細かい動きの説明ができた (J3)
- ・ 細かいことまで気をつけて、日本の作法をきちんと守ることができたと思う (J2)
- ・ 留学生に向けての説明だったので色々意識してやった (J5)
- ・ 前よりも、気をつけようと意識する点が多くなった (J8)

<気持ちについての変化>

留学生は、ルールの理解が自信や不安の払拭につながったと述べている。日本人学生は、留学生に対して、「伝えよう」「より丁寧に教えてあげよう」との配慮をするようになったと述べている。また日本人学生は、自文化の正確な知識を持ったことが、自信につながっている。自らの行動を、意識化する努力が行われている。

【留学生】

- ・ 2回目にはもっと自信を持ってできた。日本では母国よりも、ロールプレイやパブリックスピーキング等がもっと普通におこなわれているので、2回目はあまり変な感じはしなかった (I1)
- ・ 1回目はこのような役割が居酒屋で存在することに大変不安を感じ、ルールが分からなかった。2回目はルールが理解できたので、自信を持ってできた (I2)

- ・ 場面に即した順序やルールを教えてもらった後だったので、期待されている行動が明確になった (I3)
- ・ 2回目はより滑らかにできた (I4)
- ・ 2回目はもっと自信を持ってできた (I5)
- ・ より多くの情報を学んだので役に立った (I6)

【日本人学生】

- ・ 留学生が知りたがっていることを考えて説明を行おうと思った (J1)
- ・ 留学生に伝えようという気持ちがありそれによって細かい部分にもっと気をつけようという気持ちがあった (J2)
- ・ より丁寧に教えてあげようとした。無意識の行動を意識化しようとした (J3)
- ・ 自分の言葉で英語で言うのは難しかったが、ふるまい方が正確に分かった後なので、より自信をもってできた (J8)

2. セッション全体の振り返りについて

合計2度に渡るセッション全体を振り返ったときには、課題場面で学習した行動やその実施について、以下のような回答が得られた。

<課題場面と類似の状況を経験したか>

課題場面と似たような状況を経験したとする者は、留学生に2名、日本人学生に3名いた。留学生は先生と話す場面や、飲食場面の経験を挙げた。日本人学生は、飲食場面について説明してあげた経験を報告している。彼らにとっては、生活の中で実際に出会った場面であったことが分かる。

【留学生】

- ・ 初回の講義で学んだルールを、先生のオフィスを尋ねるときに使った。今回の講義の情報も、友人と居酒屋に行くときに使ってみようと思う (I2)
- ・ 日本人と何回か外で夕飯を食べた (I4)

【日本人学生】

- ・ 飲み会の時に乾杯の音頭は「かんぱい」と言う、と教えた (J5)
- ・ 留学生たちとお店に飲みに行った。先生や先輩はいない状態 (J6)
- ・ 留学生の友人が、日本人の友達の家によばれたので、冬休みはそこにとまるつもりだと言ったから (J9)

<課題場面と類似した状況での自分の行動>

経験した類似場面でもう行動したかと問うと、2人の留学生はセッションで学んだことを実践したと述べ、その行動に対して肯定的な評価をしている。1人はセッションでの学習を実際に適用してみたものだが、1人はセッション以前の予備知識を元に実行したと述べている。

実際の場面に遭遇した場合には、知っている行動なら使ってみることが分かる。

日本人学生も、スキルに未習熟の留学生に対しては、発音の工夫や小道具の使用を交えて、留学生の理解を促進させようと、自分なりに努力したことを報告している。相手のスキル獲得が確認できている場合は、その努力が省略できて見守るだけとなる。相手のスキルのレベルを見極めてから、実用レベルを鑑みた補完の説明が試みられる。日本人学生にとっても、留学生と共に集団行動をして、必要なら文化的な説明を試みる機会がある、ということがわかる。

【留学生】

- ・まだ敬語を正しく使うのは少し難しいが、先生のオフィスの訪問のしかたがかなりよく分かった (I2)
- ・とてもよくできた。日本に来る前から飲み会に関するエチケットをしていた。それが日本語のプログラムに組み込まれていたから (I4)

【日本人学生】

- ・ゆっくり発音してみた (J5)
- ・特に何も説明はしなかった。飲みに行くのに慣れている人ばかりだったので (J6)
- ・乾杯の時に、目上の人に先につぐこと、目上の人をグラスより下に、自分のグラスの口を持っていき、乾杯することを伝えたことがある。実際に食事中だったので、お互いのグラスを使って説明した (J9)

なお、欄外に、「教授と5、6ヶ月前に飲みに行った。そのときはあまりうまくできなかった。(I6)」という留学生の回答が見られた。すなわち、かつて適切な文化行動を知らずに、飲食場面で戸惑ったことがある、という体験が付記されていた。

<学習内容の実践意欲>

セッションで試したことを、今後実際に使ってみたいと思うか、という問いに対しては、参加者全員が肯定的な答え方をしている。今回学んだことを、留学生は対人関係形成に有用であると認識しており、自らの社会的品格の表現や相手への配慮の観点から、使用したいという意欲を持っている。日本人学生は、異文化接触場面における、文化行動に関する意識化と説明への意欲を記している。

【留学生】

- ・日本の人にいやな思いをさせたくないし、正しいエチケットを知らないから(使いたいと思う) (I1)
- ・日本文化において居酒屋に行くというのは重要な部分だと思うので、使ってみたいと思う (I2)
- ・文化のことを知るようになればなるほど、ことがますます容易に進むようになると思う (I4)
- ・何をすべきかを知って友達とうまくやることは役に立

つと思う (I5)

【日本人学生】

- ・私たちににとっては当たり前のことなので、つい簡単な説明で済ませてしまいそうですが、気をつけて確認をとったりしようと思う (J5)
- ・今までは日本の日常的な文化について説明することはあまりなかったのですが、これからはいろいろ説明していきたい (J6)

<潜在的な学習のニーズ>

今回取り上げた課題場面以外にも、文化行動が織り込まれた対人行動は様々に存在するので、「機会があれば、さらにどのようなことを習いたいと思いますか」と訪ねてみた。この問いは、異文化間ソーシャルスキル学習への潜在的な学習ニーズをみる意図でなされた。日本人学生1名を除く全員が何らかの希望を挙げており、多くがそれぞれ学びたい課題を抱えていることが分かる。

留学生からは、具体的な場面設定に関する希望が寄せられた。訪問や食事などの社交場面は、セッションで学びやすいソーシャルスキルを含む場面である。小包の送り方や宿泊予約の取り方も挙げられているが、これらは良好な対人関係形成に資する行動という定義からはソーシャルスキルとはいえない。だが対人関係に限らず、異文化で必要となる行為の要領を、ロールプレイで具体的に学びたいとの要望があることがわかる。

日本人学生からは、自文化である日本文化についてよく知りたい、留学生の文化や様々な文化についても知りたい、という自他の文化への興味が記されており、自文化への探求心や、他文化への好奇心を刺激されていることがわかる。対人行動に限らず料理を教えたいと述べる者も1人いたが、多くは日常生活での行動や考え方をうまく伝えたいと述べている。留学生の文化的困惑を理解したい、文化の意識化と説明がうまくなり、という仲介者役割の熟達への意欲が述べられている。

なお欄外になるが、日本人学生J1から、留学生の国と比較しながら説明していくと印象に残ると思う、という趣旨の提案が書かれていた。

【留学生】

- ・日本で食事に出かけるときのことについて学びたい (I1)
- ・日本の家の訪問、敬語の使い方 (I2)
- ・日本人の友人の家の訪問のしかた (I3)
- ・どのように店に苦情を言うか (例：洋服や破損した品物を返却する場合) (I4)
- ・デートの場面で、男性や女性の出すシグナルやサインなど (I5)
- ・小包をどうやって送るか (I6)
- ・ホテルの予約方法、交通事故の際の対処法 (I7)

【日本人学生】

- ・日本人と外国人とで、どのようなときにどのような行動の違いがみられるのかということ (J1)
- ・様々な文化について習っていれば交流も深まると思うので、様々な文化を知りたい (J2)
- ・留学生側の文化を知れば、違いに注意して教えられる (J3)
- ・日本の文化についてもっといろいろ知りたいです。日本で普通にしていることで留学生が疑問に思うことを知りたい。そして英語でそれを説明できるようにしたい (J4)
- ・茶道を習ってみたい。料理が好きなので、日本料理の作り方とか説明できればいいなと思う。あと、日本以外の文化についてももっと知ってきたい (J6)
- ・互いの行動・考え方を文化的・宗教的背景から考察すること (J7)
- ・はじめて会ったときから、どのように友達になっていくのか？どのようなアプローチをするのが自然か？ (J8)
- ・基本的なマナー、上手にジェスチャーつきで説明するしかた (J9)
- ・日本の文化を正しく身につけることを習いたい (J10)
- ・日本人が日常生活でやっていることや思っていることが、留学生には理解できない部分があると思うので、どんな時にそう思うのか、それをどのように伝えたら分かりやすいのかを習いたいと思う。特に日本人の物事についての感じ方をうまく説明できたらいいなと思う (J11)

<スキルの使用機会>

「セッションで学んだスキルを今後使う機会があると思うか」という問いは、学習課題の適用性や有用性を確認しようとする意図で設定された。セッションで扱うのは、留学生のニーズに応えるような実用性の高い場面が望ましい。身近で実用的な課題を選択できたかどうかは、問題解決や問題発生予防を鑑みると、実践性を重視した学習セッションにとって重要な観点である。

ところが留学生は、今後の使用機会に関して、否定的な回答を寄せている。回答を見ると、内容というよりはセッションの時期的な設定に反応している。一方、日本人学生からは肯定的な回答が得られた。

【留学生】

- ・あと1ヶ月で帰国するので、おそらくない (I3)
- ・すぐ帰国するのでおそらくないが、覚えておくと思う (I4)
- ・あと数ヶ月しかないなので、たぶん使わないと思う (I5)
- ・もうここ(日本)にあまりいないので、使わないと思

う (I6)

- ・この講義は9週間ほど遅すぎた (I7)

【日本人学生】

- ・異文化の人に自分たちの風習を教えることはシチュエーションが違ってもあると思う (J2)
- ・よくあると思う (J3)
- ・席につく際の、上座・下座などの説明は使う機会があるだろうと思う (J9)

V. 考察

本セッションを通じて参加者の認知や行動や情緒面に、いくつかの興味深い変化が生じていると考えられる。以下に、留学生と日本人学生の両者の視点から、セッションによる変化や効果と考えられるものについて検討していく。そして混合クラスという場の設定、および短期留学生という対象の設定に対応した、セッションの構成について検討を加える。

第一に、留学生への効果についてまとめる。彼らは日本の文化行動のパターンとその文化的背景をセッションで学んでいると考えられる。ロールプレイを繰り返すと、自分の振る舞いがより自然になり、かつうまくなると認識し、それを肯定的に評価しており、行動面での学習が成立しているといえる。なお、1回目より2回目のパフォーマンスの評価が下がった1名の留学生 (I7) に関しては、2回目の方が演技に慣れたため、日本語で話す速度が上がったことによると考えられ、I7が積極的に試行錯誤を行っていることを示す記述と解釈できる。セッションによって根本的にパフォーマンスが後退したという意味ではないように思われる。なお留学生にとって特定の、この場合は滞在地である日本の、文化的行動をとる際の不安の払拭や、自信の獲得は、学習の情緒面での効果と見なせる。行動の理由や成り立ちが理解できたとしていることは、学習の認知的な面での効果である。こうした変化から、適応支援策の一環として実施した本セッションにおいて、そのねらいに対応した一定の成果をみることは可能であろう。

留学生はこの学びを交流に役に立つ、と評価している。かつて知らなくて困った飲み会での行動を、今回は学べたとする報告もある。留学生は、社会的場面での振る舞いや対人関係の形成・維持・発展において、ソーシャルスキル獲得の持つ有用性を認識している。この視点を得たことは、今後の自然学習、すなわち教室内ではなく日常体験を通じての経験的な学習においても有用だろう。文化圏ごとに対人行動に一定のパターンがあり、観察したり説明してもらったりしながらそれを取り入れていくことが可能であり、それが社会生活上有用性を持つことを、模擬体験を通じて理解し、明瞭な着想として持つな

らば、今後のスキル獲得が促されやすいだろう。いわば学び方を学ぶ、学ぶ重要性を学ぶ意味がある。大学がこうしたアイデアを獲得する教育的機会を積極的に設定するならば、交流意欲を刺激し、関係性形成の障害を低減する一策として機能しよう。

留学生は自分の経験から、具体的に学びたい課題場面を他にも抱えており、潜在的な学習ニーズが確認されたといえる。今回のセッション内では、ごく限られた課題しか扱えなかったが、この要領で習いたい事が他にもあるという。これは対人行動上の悩みや学習の要求を示しているだけではない。対人行動以外の実用的な対応を知りたいとした意見も混じっていることから、今回の実践的な技能学習の方法を評価しての反応とみることができよう。異文化での未詳な行動を対人行動に限らず学びたいという文化的な関心、あるいは異文化での不便さや生活上の対応の必要性をよみとることもできるかもしれない。講義だけに留まらない行動レベルでの学習を、様々なテーマで欲しているということは、「実際に困った場面を取り上げて、実用的な行動的スキルを会得する」という心理教育の形が、異文化滞在者が関心を寄せる学習形態であることを示唆していよう。

第二に、日本人学生への効果について考える。彼らが熱心に参加している様子から、基本的には留学生向けに設定された今回の教育機会が、彼らを十分引きつけるものだったことが分かる。留学生の支援のための場という設定に、補助者として日本人学生が参加することから学べることは、少なくないと結論できる。

日本人学生は、慣れた自文化を素材にした文化学習から、自文化や他文化を学ぶ意欲を高めており、文化学習への動機付け効果が指摘できる。自分が異文化滞在者になった場合を、逆の立場から見通しておくという経験と捉えるならば、異文化滞在の予習効果も伴うかもしれない。例えば異文化圏で、自分が果たしたような文化的な説明者を得ようと努力して、異文化滞在をより容易にできるかもしれない。今回は留学希望者が参加していたが、彼らは興味を持って参加しやすいと思われる。日本人学生が他国へ出て行くための、準備段階における導入教育として眺めていくのも、興味深い観点であろう。

日本人学生は、自らが比較的無自覚だった日本文化を見直すことを、新鮮な体験と捉えた。一般に「文化的気づき (culture awareness)」と呼ばれる、異文化コミュニケーションの準備として必要な文化的自覚の段階が指摘されているが、このセッションは、ホストがこの「気づき」を高める機能があったといえる。すなわち、文化的気づきの獲得効果が指摘できる。無意識に実行していた文化的行動を意識化し、滞在者の視点から眺める体験は、新たな発見をもたらす。文化には説明が必要なことが分かり、どうしたら細かく説明ができるのか工夫し、要領

と努力がいることを理解した。

こうした理解が発生するメリットは、二つ指摘できる。一つは、異文化滞在者の困難への共感的理解や滞在者との視点の共有が、滞在者支援に有用であること。二つ目には、この理解と説明の実践が、文化的理解を仲介していく「異文化間インターメディエーター」(田中・松尾、1993)の能力の獲得と、その実行につながることである。すなわち支援能力向上の効果と、仲介能力向上の効果があるといえる。

第三に、混合クラスの意義と課題を考える。異文化対応の能力を涵養する目的で、留学生を対象とした混合クラスに、日本人学生を補助者として参加させることは、両者にとっての教育効果と交流の拡大をもたらさうといえる。日本人ホストが文化的仲介者の役割を果たしつつ、異文化滞在者の理解者となり支援に尽力することを媒介していくことが期待できる、この混合クラスの効用を、大学側はもっと認識してもよいかもしれない。もともと支援者となる意欲や文化への関心が高い日本人学生が参加できると、学習補助者としての役割取りが速やかに進み、セッションの進行は滑らかになるだろう。また文化の解説は、あくまでも文化的パターンの例示による知識の提供であり、実際には個人の行動選択が重視されることや、文化行動の強制を目的とするものではないことをよく了解しておいてもらうことも必要である。セッション中は受容的な雰囲気醸成し出す言動に心がけてもらうことを、周知しておきたい。

混合クラスならではの難しさも存在する。両者の異なる学習ニーズのバランスをどうとるか。今回は、補助者として参加した日本人学生にとって、発展的学習が十分に整えられていたとはいえない。自分たちにとっての異文化を含む、多文化を学びたいとの声があった。今回は短時間のため、主に留学生の滞在先に関わる文化学習に焦点を当てている。だが他の文化と比較しながらある文化のソーシャルスキルを学ぶという、多文化対応の学習形態は、セッションとしては十分可能である。自文化紹介のディスカッションや自文化学習のプラン作りを、セッションに取り入れる方法も紹介されている(田中、2007)。特に渡航準備教育としての活用を考えるならば、対象文化一つのみを集中的に学ぶことと、多文化について学習するのと、どちらを設定するかという、教育過程上の選択肢に還元することは、興味深い問いの設定であろう。

第四に、短期留学生の特徴に鑑みて、セッションの課題を考える。セッションの実施時期は、今回の反省点として指摘せねばならない。本セッションは留学生の来日後、数ヶ月を経過してから実施されている。ある程度日本文化を実体験してから学習に臨むので、実生活上の課題を解決する意義や動機付けは高いかもしれない。しか

し短期留学生は滞在期間が限られているため、できるだけ早くに留学先の文化に慣れることが重要だという面は、無視できない。「学習内容を今後実地で使う見込み」を尋ねたときに、もうすぐ帰国だから使いたいけれど使わないだろう、という反応がみられたことは、交流への具体的効果を確認しにくいという意味で残念といえる。文化学習として興味深かったと述べているので、学習の意義は無ではなく、帰国前に文化理解を整理できたメリットはある。ただ短期留学生の異文化適応や交流促進を目的に据えるなら、ある程度早い時期にセッションを実施する方がよいだろう。可能なら渡航前に、いわば文化的な予習として教育機会を提供することも考えられる。

最後に、今後のセッション構成について考える。より長時間のセッションが企画できるならば、留学生に自国のスキル紹介や日本人向け学習プランの作成をしてもらったり、ディスカッションの中で留学生に自国のやり方を聞いたりするなど、文化行動の相対化をねらったセッション運営を試みるのも興味深い。日本人学生が多い場合には、滞在者支援の視点だけではなく、多文化への興味が増す機会としての面を補強して、文化交流的機能や文化間比較を積極的に取り入れる構成も一案である。しかし、問題解決的な観点からの実効性ある行動レポーターの獲得という、セッションの本来の性格を生かすなら、他の授業とシリーズを組んでその一貫としてパッケージに収める、といった工夫が妥当であろうと思われる。

短期留学プログラムは、大学の国際化を主目的として推進されている。限られた滞在期間ではあっても、短期留学生もこうしたセッションでの学びをきっかけに、文化交流の架け橋としての存在意義を自覚していくことが望まれる。人対人のつき合いに進んで触れていくこと、草の根レベルの国際化に受身ではなく能動的に貢献していくことが期待される。そのための能力を高めていくという教育的な支援を、大学は例えば今回のような形で用意することができることを提案したい。

謝辞

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)課題番号 12610126 研究代表者 田中 共子）の助成によって行われた。

本研究で使用したビデオ映像は、高井次郎先生（名古屋大学）、松尾馨先生（元・福山大学）と共に作成した

ものであり、留学生の方々に出演して頂きました。ご協力に深く感謝致します。

注

- (1) プライバシー保護の観点から、実施時期の詳細を伏せた。
- (2) 本稿の第二著者が講師役を務めた。

参考文献

<日本語文献>

- 文部科学省高等教育局学生支援課、「我が国の留学生制度の概要 受け入れ及び派遣」、2006
- 田中共子、「アメリカ留学ソーシャルスキル 通じる前向き会話術」、アルク、1994
- 田中共子、「在日留学生の異文化適応：ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から」、『教育心理学年報』、1998、37、143-152
- 田中共子、「在日留学生の異文化間ソーシャルスキル学習」、岡山大学文学部研究叢書 20、2000a
- 田中共子、「留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル」、ナカニシヤ出版、2000b
- 田中共子、「異文化間ソーシャル・スキル学習による臨床社会心理学的介入研究（平成12～14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書）」、2003a
- 田中共子、「第5章 異文化適応の臨床社会心理学的アプローチ」、田中共子・上野徳美編、『臨床社会心理学——その実践的展開をめぐる——』、ナカニシヤ出版、2003b、89-114
- 田中共子、「異文化適応方略としてのソーシャルスキル学習」、藤原武弘編、「人間関係のゲーミング・シミュレーション——共生への道を模索する——」、北大路書房 2007、179-200
- 田中共子・松尾馨、「異文化欲求不満における反応類型と事例分析—異文化間インターメディアエーターの役割への示唆—」、『広島大学留学生センター紀要』、1993、4、81-100
- 八島智子・田中共子、「ソーシャルスキル訓練を取り入れた英語教育：アメリカに留学する日本人高校生を対象として」、『異文化間教育』、1996、10、150-166
- 横田雅弘、「岐路に立つ日本の大学——全国四年制大学の国際化と留学交流に関する調査報告——（文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）日米豪の留学交流戦略の実態分析と中国の動向——来るべき日本の留学交流戦略の構築——平成15年・16年・17年度調査 最終報告書）」、2006

<外国語文献>

- Yashima, T. & Tanaka, T. Roles of Social Support and Social Skills in the Intercultural Adjustment on Japanese Adolescent Sojourners in the USA, *Psychological Reports*, 2001, 88, 1201-1210